

ひろがる

校長 安達 修久

わたしは小さいとき、/おやつのお菓子が弟より大きくない/とおこった。
じだんだふんで泣いたこともある。/わたしが世界のすべてであった。
わたしが世界のすべてであった。/やがてわたしは、弟もわたしと同じように、
大きいお菓子をほしがっていることが、/わかってきた。
わたしはけんかしながらも、/同じように分けることをおぼえた。
ときには、弟があまりうまく食べるので、/自分のぶんも分けてやった。
弟といっしょにお菓子を食べると、/お菓子の分量はへったが、なんとなく楽しい。
こうして、わたしの中へ弟がはいってきた。/こうして、わたしの中へ弟がはいってきた。(以下略)



(「わたしはひろがる」岸 武雄 より)

12月10日の世界人権デーにあたり資料を見ている中で、この詩が目にとまりました。詩の中の「わたし」は、このあと「おかあさん」「ともだち」へと次第に広がり、日本や外国のことにまで広がっていきます。弟と張り合ってしまう、自分が一番で、他の人を思いやるなど考えもできない「わたし」。やがて少しずつ仲良ししたりぶつかり合ったりしながら、その一人一人が自分の中へ入ってきて、かかわりは広がっていきます。その考えや想像が広がった先で、直接はかかわることのないより広い世界にも思いをはせるようになります。徐々に視野を広げ、自分がすべてだった世界が広がり、他の人のことを考えることができるようになるさまは、誰もがたどる成長の道筋なのではないかと思います。

子どもたちの「わたし」はどこまで広がるのでしょうか。年齢、発達段階によっても異なるでしょうが、釜利谷小学校に通っている全員とかかわるには、人数が少し多いかもしれません。しかし自分のクラス、学年ぐらいいまでなら、かかわりをつくって広がることはできるのではないかと思います。また11月に行ったペア学年の活動では他の学年に、なかよし活動のかかわりでは全学年へと広がります。さらに保護者の方々、ボランティアをはじめとする地域の方々にも広がるでしょう。

学校では、ともに学び遊び、みんなで楽しく活動できた、うまくいかないことがあっても協力し合えた、努力してやり遂げられたという経験が日々積み上げられていきます。コロナ禍でしばし途絶えていましたが、制限がありながらも少しずつまた再開することができました。みんなでやるから楽しいことがあり、思い出も大きくなります。みんなでやるから乗り越えられることがあり、自分一人では出せなかった力が出せることがあります。一つ一つの経験が力となり、やり遂げた充実感も大きくなります。一緒に取り組んだ仲間が「わたし」の中へ入ってきて、「わたし」はもっと広がり、もっともっといろいろなことに興味をもってチャレンジすることができるようになるでしょう。世界のこと、地球や宇宙、未来にも思いを広げることができるかもしれません。

令和4年度はあと4か月となりました。クラス、学年、ペア学年やたてわりで楽しく過ごし、子どもたちが「わたし」をいっそう広げて、次のステップに向かえるようにしたいと思います。